

平成 22 年度
希少猛禽類との保全とエゾシカ対策の実施に関する意見交換会 第 1 回会議

議 事 要 点

日 時 : 平成 22 年 5 月 30 日 (日) 11:00~15:00

場 所 : 羅臼町役場 第 1 会議室

出席者 : 以下一覧の通り

希少猛禽類専門家 (50 音順)	
東京農業大学生物産業学部 講師	白木 彩子
シマフクロウ環境研究会	竹中 健
斜里町立知床博物館 館長	中川 元 (欠席)
帯広畜産大学 名誉教授	藤巻 裕蔵
日本鳥類標識協会 会員	山本 純郎
羅臼町教育委員会 郷土資料室長	涌坂 周一

知床世界自然遺産地域科学委員会 エゾシカ・陸上生態系ワーキンググループ 委員 (50 音順)	
専修大学 北海道短期大学 みどりの総合科学科 教授	石川 幸男
北海道環境科学研究センター 自然環境部 研究主幹	宇野 裕之 (欠席)
東京農工大学 共生科学技術研究院 教授 (エゾシカ WG 座長)	梶 光一
森林総合研究所 北海道支所長	川路 則友
岐阜大学 応用生物科学部獣医学講座 教授	鈴木 正嗣 (欠席)
財団法人自然環境研究センター 研究主幹	常田 邦彦
北海道環境科学研究センター 研究主幹	間野 勉
北海道大学 北方生物圏フィールド科学センター 教授	日浦 勉
横浜国立大学 環境情報研究院 教授	松田 裕之
酪農学園大学 環境システム学部 地域環境学科 教授	宮木 雅美
北海道大学 名誉教授 (科学委員会委員長)	大泰司 紀之

関係行政機関		
北海道森林管理局 企画調整部保全調整課	自然遺産保全調整官	宮本 元宗
同 根釧東部森林管理署	署長	中澤 文彦
北海道環境生活部環境局自然環境課	主幹	宮津 直倫
斜里町総務環境部環境保全課	自然保護係長	岡田 秀明
羅臼町環境管理課	課長	川端 達也

同	主事	遠嶋 伸宏
---	----	-------

意見交換会事務局		
環境省自然環境局 野生生物課鳥獣保護業務室	室長補佐	山本 麻衣
同 釧路自然環境事務所	所長	野口 明史
同	次長	則久 雅司
同	野生生物企画官	渡辺 洋之
同	野生鳥獣感染対策専門官	小野 宏治
同	自然保護官	三宅 悠介
同	自然保護官	澤野 崇
同 ウトロ自然保護官事務所	上席自然保護官	野川 裕史
同	自然保護官	中村 仁
同 羅臼自然保護官事務所	自然保護官	中川 春菜

意見交換会運営事務局		
財団法人 知床財団	事務局長	山中 正実
同	事務局次長	田澤 道広
同	羅臼地区事業係 係長	新藤 薫
同	保護管理研究係 係長	小平 真佐夫
同	羅臼地区事業係	坂部 皆子
同	保護管理研究係	秋葉 圭太

以下、議事概要の記述において、発言者を示す際の敬称・肩書は省略する。

議 事 要 点

環境省説明: 本会のような意見交換の場が必要だとの各方面からの進言を受け、昨年度3月に第1回の意見交換会を開催、今回はその第2回目である。本会はそれぞれ個別の問題について意見をもらうという趣旨であるので、現場ごとに意見をいただく必要がある。このようなことから、現地視察を踏まえての会議として、今年度中にもう1回、現地視察も含めた会議を行うつもりである。

本日議題の1点目は、「(1)知床岬におけるエゾシカ密度操作実験の評価と今後の進め方」、2点目は「(2)ルサ相泊地区における新たな捕獲手法の試行状況と今後の進め方」である。

(1) 知床岬におけるエゾシカ密度操作実験の評価と今後の進め方

環境省説明: 昨日のエゾシカ・陸上生態系WGでは、知床岬の密度操作実験は3年間で終わったが、今後も実験を継続していくこと、暫定的な目標として1平方キロあたり5頭を目標としてエゾシカの駆除を行って

いくことなどが確認された。また、仕切り柵(以下、「柵」という。)を設置した上で銃猟との併用を採用していくこと、柵については将来的に撤去する方針であることも確認した。

また、この冬には柵が設置完了には至らないことを踏まえ、これまでと同じ方式の捕獲を行う予定であるが、流水前に船による人員輸送での捕獲を 1 回、流水期にヘリコプターによる人員輸送での捕獲を 1 回、さらに流水期後に再度船での捕獲を 1 回行うことを基本としながら、この秋・初冬のシカの集結状況をみながら考えていこうということとなった。柵が今年度中には一部しか出来ないという前提で、どの場所への設置を優先させるべきかについて引き続き検討することでご同意いただいた。以上が、昨日のエゾシカ・陸上生態系 WG の要点である。

今後は、柵の詳細な配置や構造などについて検討するとともに、関係機関との調整・各種手続きに入るが、一方で希少猛禽類の営巣地があることに鑑み、希少猛禽類の立場からもご意見をいただきたい。また、この冬もエゾシカの捕獲を行うことになるため、希少猛禽類に関してどのようなモニタリングを行っていくのかなどについても、本日も議論いただきたい。

柵を用いた捕獲という方法をとることによって、今までよりも希少猛禽類の巣に近づくことなく捕獲が可能になるのではと考えている。モニタリング方法については、また後ほど議論の時間を持ちたいと考えているが、まずは柵の設置に関する留意点などあれば伺いたい。なお、柵の設置にあたっては、資材などをヘリコプターで搬入する必要があると考えている。これについては、基本的に希少猛禽類の巣から離れた場所にヘリで搬入しておき、希少猛禽類のヒナが巣立った後に人力で現場まで運び込む方向で考えている。

柵の設置が希少猛禽類に与える影響の可能性について

- ・ 柵の存在自体は希少猛禽に悪影響を与えないが、施工時を含む人間の動きが影響を与える。設置工事を営巣時期に行わなければ柵の設置自体は問題ないと考えてよいだろう。
- ・ 最も重要なことは、繁殖への影響や攪乱を抑えることである。従って、柵の設置作業についても、繁殖が終わった 8 月以降くらいで検討する。

密度操作実験が希少猛禽類に与える影響の可能性について

- ・ 実際のシカの捕獲に際して、希少猛禽類に影響を与えぬよう、人間側の動きをコントロールすることは可能である。
- ・ 現状では希少猛禽類に関するデータが少なく、適切な助言ができない。現地において、いつ、どういう人間が、どのような行動をするのかについて示してもらえれば、それに先駆けて収集すべきデータは何かを示すことができる。
- ・ シカの捕獲作業をしていない自然状態での希少猛禽類のハビタットユース(行動圏やその利用頻度など)について、シカ捕獲の実施前に調べておくことが必要である。
- ・ ハビタットユースの調査をおこない、利用頻度が高いと判明した場所には人間が出入りしないように出来れば良い。しかし、実際にシカを捕獲する回数にもよるだろう。

- ・ 捕獲作業時以外の自然状態での希少猛禽類の動きについては、カメラを設置することで把握が可能かもしれない。また、実際の捕獲作業時に、捕獲業者とは別に専門の観察者による調査を実施するのがベストである。これにより、(シカを捕獲していない)自然状態での行動と、捕獲作業がおこなわれている際の行動の比較検討が可能になる。
- ・ シカの捕獲が本当に希少猛禽類の行動や繁殖に影響を与えているのかどうかを一度きちんと調べて、客観的に判断できるデータが得られれば、影響の程度についての判断も出来る。
- ・ 今年度の冬には専門家に観察を依頼して、希少猛禽類に関する調査を実施し、きちんとしたデータを集めたい。また自然状態での行動についても基礎情報として押さえたい。

結論 柵の設置自体については、時期などに配慮すれば問題ないであろうという合意・了承を得た。運用面については、特に冬期のモニタリングを経て、その結果次第で検討に移ることとする。

(2) ルサ相泊地区における新たな捕獲手法の施行状況と今後の進め方

環境省説明: 今年度の報告と来年度以降の手法の実施方法について説明を行った。ルサ地区ではシャープシューティング(以下、「SS」という。)を、改良を加えつつ試行を継続する。また、相当数のシカがいるようなので、この冬は囲いワナも併用して試してみたいと考えている。

ルサ地区で設置を検討中の囲いワナについて

- ・ ルサ川河口のふ化場跡の囲いワナ設置は、場所的には容認できるが、全ての作業は日没1時間前に確実に終えるなどの配慮が必要である。
- ・ ドライブネットが使えるのではないか。道路わきに頑丈な防雪柵が設置されているようなので、越冬している斜面に漏斗状に網を張って、下に餌を置いてシカを寄せ、上から追いこんでシカを捕獲する方法はどうか。小規模な捕獲網を複数作るという方法もあるのでは。
- ・ この地域のシカはほとんど移動していないと思われるが、捕獲圧が加わるなどの変化が生じた場合の動きについては予測できない。
- ・ ルサ川河口付近において、ふ化場跡やルサ FH 裏手に囲いワナを設置し、追い込んだシカに対して銃を使うことは、ルサ FH 裏では問題ないが、ふ化場跡では微妙である。

希少猛禽類のモニタリング手法について

- ・ シカの捕獲と並行して希少猛禽類のモニタリングが出来れば良い。
- ・ カメラを設置するのは、予算・作業量ともにさほど大きなものではない。希少猛禽について

は、カメラを設置する方向で検討し、モニタリングを行い、この機会にきちんとしたデータを収集したい。

- ・ ルサはアクセスが容易なので、機械に頼らなくても調査できることはある。
- ・ 鳴き交わしのパターンはだいたい決まっており、これを観察することで影響の有無はおおよそ把握できる。ただし、その影響が何によるものかを把握するのは極めて困難だ。

ルサでの SS の継続について

- ・ 今後は SS をより改善しながら、囲いわなの設置も含め、さまざまな方法についてデータを取りながら試していきたい。
- ・ この地域では捕獲方法の試行段階であり、捕獲目標の数値などは決まっていないが、知床岬と違って閉鎖形ではないため、数値目標の設定には工夫が必要である。半島の反対側のルシヤ・テッパンベツとの移動関係についても興味がある。
- ・ この地域では、知床岬と違いこれまで植生調査がほとんどされていないため、以前の植生状態を把握できる写真や資料があれば是非参考としたい。

結論 ルサ川河口に囲いワナを設置することは、希少猛禽類への配慮を前提として容認された。ただし、同所における銃の使用については、調査やモニタリングなどを経るべきとの結論に達している。調査・モニタリングについては、専門家の助言・協力を仰ぎつつ、カメラを設置する方向で検討を進める。SS については、その具体的手法に改善を加えながら、ルサ川右岸（ルサ FH 裏）での実施を継続する。

(3) その他

- ・ エゾシカ個体数把握のためのヘリコプターセンサスについては、現在わかっている希少猛禽の営巣地周辺を避けて飛行すれば良いという助言を受けている。繁殖期間中に巣の直上を飛ぶということなどは避けるべきと考える。実施の目処がついた段階で個別にご相談したい。
- ・ 森林管理局が春苅古丹林道で実施したエゾシカ対策については、今年度は秋に囲いワナを設置して 2～3 月に捕獲できないかと考えているが、近くで営巣する希少猛禽がいるようであればシカの捕獲は難しくなる。実施できた場合には、生体捕獲を考えているが受け入れ先とのやり取りはまだしていない。世界遺産地域内では、岩尾別台地上などでの捕獲も考えている。

以上